

【考察】

チェックリストの各領域の多くの項目で、学年進行で得点が徐々に上がっており、学習の積み上げが感じられる。

チェックリストの各領域について１つ１つ検討していく。まず、「健康管理」の領域では、「自分の強みや弱み」、「障がい特性」の項目では平均点が２点台となっている。様々な教育活動を通して自己の振り返りや他者からの評価等を行っている中でも、生徒が自己理解を進めることの難しさが伺える。卒業後、安定した職業生活を送るためには、生徒たちが自分のことが分かり、説明できる力は必要であり、今後も、職業自立等を通して「自己理解」を深める活動に取り組むことが大切である。また、「健康管理」の領域は、学校で学習することが難しい内容が多く、保護者との情報共有を図りながら、生徒自身が自分の生活を振り返り、意識を変えていくことが重要である。

次に、「日常生活管理」の領域では、どの学年でも、「清潔」、「身だしなみ」、「季節の服装」の項目が３点台となっている。日々の学校生活の中で繰り返し指導していることでの成果であると思われる。また、「月単位の金銭管理」、「１カ月の収入」、「疲れの取り方」については学年が上がるごとに点数も上がっている。これらの内容は中学校段階では扱われにくい学習内容であり、生徒たちが様々な教科での学習を継続することで、徐々に積み上げられていると考えられる。

また、「対人スキル」の領域では、多くの項目が平均３点を越えている。３学年に共通して平均点が２点台であったのは、「自分から声かけ」、「思いを伝える」、「会話のきっかけ」といった自発的なコミュニケーションの力である。職場では、「言われたことだけをやる」、「言われないからやらない」等の受け身な姿勢ではなく、自分から同じ職場で働く方々とコミュニケーションをとりながら、主体性を持って行動することが求められる。分からない時に自分から質問したり、話し合いの中で自分の考えを話したりする等、自発的なコミュニケーションは、学校生活の様々な場面を通して身につけることができる大切な力であり、意図的に仕組むことで、その力を伸ばすことができると考える。

さらに、「基本的労働習慣」の領域では、学年が上がるごとに徐々に点数が上がっている傾向が見られる。このことは、専門教科や現場実習等、実際に働く学習を通して、学習が積み上げられている成果であると考えられる。中には、１年生の得点が２年生よりも高くなっている項目もあった。これは、悪天候やコロナ禍の影響を受け、現場実習等、実際の場での活動の機会が少なくなり、他者から評価を受けたり、指導されたりする機会が減ったこと等から、１年生の点数が高くなっていることが予想される。

最後に、「職業適性」の領域では、「作業手順の変更」、「作業内容の変更」、「指導者の交代」で１、２年生の平均点が２点台となっている。これは、障がい特性でもある物事の変化への対応の弱さからくるものだと考えられる。学校の教育活動は環境を整えやすいという面があるので、在学中に人やもの、手順の変更等、想定される変更についても学習活動の中で設定し、実践しておくことは将来の働く上でも非常に重要である。